平成三十年神田古本まつり（乾）

土屋　博

一「和漢日用作文捷径」西野古海編輯

（東京文江堂、明治八年發兌）古書價格千円也。和綴。例言に曰く、「此書は方今の勢情を熟察し文才の盛增を輔けん爲民間平生用ゐる所の簡牘を掲書し部類を分ち古人の熟語を聚集し幼童作文の資に供する文寸駸歩の階梯なり」と。試みに「賀新年之文」を見るに、履端之御賀、萬象維新、四海同風、千喜萬福、擧家無恙迎年、鳳曆紀元椒酒賀新、恭祝雞日、澄景載煥、萬代不易など用例極めて豐富にていづれ使用したき心地ぞする。

二「日本名勝詩選　全五冊」小野湖山先生題辭、行德玉江先生編輯

（蒿山堂、明治三十九年第三版、定價六拾錢）古書價格千五百圓也。和綴。明治三十二年の玉江の弁言より、「余有討奇探勝之癖而醉花嘯月以爲樂」「近歳有腳疾不得出遊不堪無聊」「因鈔錄古今名家詩朝夕吟誦以供臥遊之樂」。一冊目は、五畿內（山城、大和、河內、和泉、摂津）に始まり、冒頭は廣瀨旭莊「京師」、賴山陽「京都」など。五冊目の掉尾を飾るは台湾。編輯者玉江は「漢文學者總覧」にも掲載無き無名の人物、一方題辭の湖山先生は梁川星巖の愛弟子なること判明す。

三「慶壽百人一首」

（編集印刷兼發行者鈴木萬次郎、明治四十年刊）古書價格千圓也。和綴。絵入り。女性向け書籍と覺ゆ。手書きの假名文字は讀みにくしと雖も、慣るることを得ば身につくべし。上欄に、女手習教訓狀、御所大和言葉、男女相性の事などあれど、手書き故讀むこと容易ならず。

四「美文斷錦」鶯溪散史編

（求光閣書店、明治四十年二十版、三三六頁）古書價格二百圓也。初版は明治三十五年。たとへば、賴山陽の今様、「ふとん着て寢たる姿はふるめかし、起きて春めく智恩院、その楼門の夕暮にすいたお方に逢ひもせで、すかぬ客衆に呼びこまれ、山寺の入相告ぐる鐘の聲諸行無常はまゝのかわ、わしは無性にのぼりつめ花の頂きどれ見やう、花はうつらふものなれど、葉こそおしけれ葉こそ翠のめだち色深見草」。

五「操觚字訣」伊藤東涯著

（須原屋書店、明治四十年七版、正價金壹圓貳拾錢、七七二頁）古書價格千圓也。版権免許明治十一年、初版明治十八年。伊藤東涯（一六七〇年生、一七三六年歿）は伊藤仁齋の長男。小生の名前の博につきての記載をみるに、廣、博、汎、寛、潤、弘に用法の違ひあり。「博は大に通ずる也、はゞのひろきこと也。物のうすひらたきやうなる意あり。事にとりていへば、物の手びろきことなり。」と。

六「日記文範」大和田建樹編

（博文館、明治四十年刊、定價金參拾五錢、三〇〇頁）古書價格二百圓也。通俗作文全書シリーズの第十一巻也。本居宣長の菅笠日記、香川景樹の文化二年日記、萩原廣道の水蓼、加茂真淵の後の岡部日記、本居大平の春の錦など。

七「中等國史辭典」不破信一郎、矢野太郎、山內二郎共編

（隆文館、明治四十一年刊、定價金壹圓五拾錢、本文九一八頁）古書價格二百五拾圓也。人名は總て名又は號を先とする編集方針にて、「賴山陽」は「さんよー」にて引くことを得。「安永九年生天保三年歿。安藝の人名は襄父を春水といふ。山陽幼より學に敏なり。年十三詩を作りて父春水に江戸に寄す。

柴野栗山之を見て感嘆し春水に勸めて大成せしむ。十五六歳にして家學を受け經子史集渉猟せざるなし。年十八江戸に出で尾藤二州の塾に入る」以下略。

八「七十偉人」井野邊茂雄著

（武田文永堂、明治四十二年刊、定價金五十五錢、二四六頁）古書價格三百圓也。百濟に使ひせる膳巴堤便（かしはでのはてひ）の吾が子を襲ひたる虎に復讐したる「猛虎の害」など。

九「近古史談鈔　全」簡野道明校訂、國語漢文研究會編

（明治書院、明治四十四年刊、定價金貳拾四錢、一一八頁）古書價格八百圓也。和綴。文部省檢定濟教科書。目次は、織篇第一、豐篇第二、德篇第三上下。

十「明治維新　三大政治家　大久保・岩倉・伊藤論」池邊吉太郎述

（新潮社、明治四十五年刊、定價金七拾五錢、三一三頁）古書價格九百圓也。中公文庫に復刻版ある原本なり。著者池邊三山は一八六四年生れのジャーナリスト、朝日新聞主筆を務め、蘇峰・陸羯南とともに明治の三大記者と言はるる人物なり。

十一「各種文體自在　文章寶鑑」榎本秋村著

（實業之日本社、明治四十五年刊、定價八拾五錢、五五八頁）古書價格二百拾六圓也。名家の記事文漢文體篇にあるは、蘇東坡「喜雨亭記」（亭に雨を以て名くるは喜を志す也。右は喜びあれば則ち以て物に名く）、范文正公「岳陽樓記」、李華「政事堂記」、德川光圀「弘道館記」、賴山陽「九霞樓記」など。

十二「國漢文及作文　類字鑑」慶應義塾大學講師浅井無二郎編

（誠之堂書店、大正二年訂正第三版、定價金七拾錢、四五〇頁）古書價格二千圓也。初版は明治四十三年。特に附錄の「候文の用字用語法及文例」は示唆に富む。餘寒見舞の女性文例は以下の如し。「文して申上まゐらせ候今に御寒さ強くおはしまし候ところ御両親様御子たちさまなど御かはりも入らせられず候やあまりのとほどほしさにつき四五日前より御伺申上度と申居ながら留守番のなさに兎角出兼候故またまた御無沙汰に相成誠に御申譯も御座なく候いづれ近日かならずとは存じ候へども先取あへず文して此くの如くに御座候かしこ」と。

十三「三訂　和漢文藻　全」東京外國語學校編

（東京外國語學校、大正二年刊、三一〇頁）古書價格千圓也。東京外國語學校といひ條、東大の前身の時代よりは後、東京外大の前身の時代なり。朱文公の勸學文（謂ふこと勿れ今日學ばずとも来日ありと）に始まり、山上憶良（をのこやも空しくあるべき萬代に語り繼ぐべき名は立てずして）にて終る。新井白石、山崎闇齋らの手稿の美しきコピーを含む。大町桂月の作品よりは、「胡蝶」、「病院」、「佛濵の月夜」、「墓畔の秋夕」採用せらる。

十四「乃木將軍實傳」碧瑠璃園著

（隆文館、大正二年刊、定價金參圓、本文八九四頁）古書價格千圓也。大阪朝日新聞に連載分に學習院時代以後を加筆したるものなり。題辭は、二條基弘公爵「忠貞」、澁澤榮一「遺墨淋漓泣鬼神」など。

十五「唐詩新調」浩風吟客著

（修養團本部、大正九年刊、正價金壹圓、一二九頁）古書價格二百五拾圓也。函入。漢詩の情調を吟誦形式により青年の心の中に培ふ試みにて、たとへば李白の静思夜は、「窗を開ければ地は月明り　霜が降りたと見疑ふばかり　山の端に照る月見上げては　故郷戀しの物思ひ」といふ具合なり。

（平成三十年十二月八日受附）